『尾張国郡司百姓等解文』における二字漢語の声点

加藤大鶴

【キーワード】尾張国郡司百姓等解文　漢語アクセント　中低型回避

1　はじめに

稿者は和化漢文資料として、古文書『尾張国郡司百姓等解文』（以下本資料）を取り上げ、字音声点の分析を行った（加藤大鶴 2009）。漢籍や仏典などに現れる字音を、規範・学習という観点における一方の位相的な極とし、逆の極として和文資料に現れる字音を模式的に仮定したときに、和化漢文はその中間に位置するとされる。旧稿においてはそうした仮定のもとで、字音レベルの分析を通して資料の位置付けを試みた。得られた主な結果は以下のとおりである。

1. 声調体系に軽声を区別する諸本が認められる。
2. 鼻音韻尾字に後接する字に連濁が多数生じている。また読み癖的な語頭濁音も認められる。
3. 漢音読み字音と呉音読み字音が一資料内にほぼ同数～2 対 1 程度（諸本により異なる）混在している。
4. 一語内に漢音と呉音を交える、混読語と疑われる例が認められる。

これらの結果は、先行研究で報告される和化漢文の字音の現れ方に概ね合致しながら、13～14 世紀における字音の特徴を反映すると考えられる。

このような分析手法は、字音の側に立ち、規範的な音からの弛緩の度合いによって資料を位置づけるものであった。この弛緩の度合いを日本語化という視点で捉える場合、日本語のアクセント研究の立場から解釈が可能か検討する必要があろう。本稿では分析の単位を二字漢語とし、それらを漢音漢語や呉音漢語と位置付けられるものとそうでないものに整理する。

ところで、本稿で示す「平平型」などの声調型は、声点から解釈される声調の組み合わせをパタン別に分類したものであり、「アクセント型」のように音韻論的な区別をただちに前提とするわけではない。もっとも、和化漢文における「漢語」と捉える以上、日本語音韻体系に組み込まれた形で発音されたと考えるのが自然であろうから、音韻論的な区別を前提とする見方も可能ではあろう。しかし本稿ではそのような前提が認められない声調型（中低型）も一元的に扱うため、音韻論的な区別を前提とせずに声調型を整理した。そのレベルでの傾向を観察す

ることを通じ、特に漢音・呉音漢語から逸脱したものについて、日本語アクセントからの説明を試みたい。

2　資料について

本資料および諸本の成立については旧稿にて論じたところであるが、本稿の分析に必要なことのみ概略を述べておく。

本資料には十数本の写本が存するとされるが、本文の欠が少なく、13〜14 世紀の書写年代の明らかなものに (1) 早稲田大学図書館蔵弘安 4 年 (1281) 写本、(2) 東京大学史料編纂所蔵応長元年 (1311) 写本、(3) 真福寺宝生院蔵正中 2 年 (1325) 写本の 3 本が挙げられる（以下それぞれ早大本、東大本、真福寺本と称す）。この 3 本はおのおの写本系統を異にすることが指摘されている（梅村喬・水野柳太郎 1980）。早大本の本文は第十四条半ばから第三十一条初めまでを欠いているが、字音注記は 3 本中最も多い。注記類はわずかを除き本文と同筆と見られる。声調体系は 5 声である。調査は原本によった。東大本の本文は第一条〜五条初めまでを欠く。また第三十一条末「以前條事」以下末尾までは、料紙が新たに貼り継がれ、異筆にて補写されている。この部分には同じく異筆にて訓点や字音注が記されているが、全体として注記類を見た場合、本文と同筆のものと、それとは別のものとが見受けられる。本稿では補写部分の漢語に㊟、また本文と別筆の注記を㊟としている。声調体系は 6 声、ただし別筆によるものは 4 声体系である。調査は影印本（東京大学史料編纂所編 2009）によった。真福寺本の本文は首部第一条を欠く。ヲコト点（博士家点）が付されるほか、注記類も部分的に付される。声調体系は 4 声である。調査は影印本（新修稲沢市史編纂会事務局 1980）によった。これらの 3 本における字音注記は、注記の書記形態・音韻の特徴から院政期から鎌倉期の様相を呈しており、原本（永延 2 年,988 年）のものを継承したとは見なしがたい。

3　分析の方法

旧稿では声点の表す声調が呉音か漢音か決定するために、広韻と呉音資料（本稿末尾参照）を調べ、当該字の声調が一方と排他的に一致するものを呉音・漢音と認めた。入声については判定の対象としていない。上声点については、呉音声調が平・去・入の 3 声体系であるため、呉音去声でも一致とみなした。

次節以降では、上記の分類に基づいて構成される 2 字の組み合わせによって、漢音漢語、呉音漢語、字音系統が不明の漢語、漢音呉音の混読漢語、その他説明

がつかない漢語に分ける。いま単字声調の分類の結果、漢音をk、呉音をg、入声をn、漢呉同音を=、呉音資料に当該字なしをx、字音系統不明（どちらにも一致しない）のものをf、漢音か呉音に2つ以上の声調を持つものを2として、kk・k=・kn・k2の組み合わせ（順不同、以下同じ）を漢音漢語、gg・g=・gn・g2を呉音漢語、xを含むもの（ただしfを含まず）を字音系統が不明の漢語、kgを漢音呉音の混読漢語、fを含むものをその他としている。

また他資料に現れる漢語への差声例も参考として、各個別例に併記した。用いた資料は、『三巻本色葉字類抄』、『楊守敬旧蔵本将門記』（1058-1080年頃点）および『真福寺本将門記』（1099年点）*1である。『色葉字類抄』は和化漢文を取り扱った先行研究においていくつかの一致例が確認されており（佐々木勇2009:pp.675-732）、『将門記』はすでに和化漢文として字音声調について研究の蓄積があること、および本資料に現れる語彙と共通するものが多い（浅野敏彦1985）ことによる。

4　早大本

4.1　漢音漢語

漢音漢語と認定したものは29(30)例となる。表1からは、1例を除き中低型（平軽平軽型・平軽上型・平軽去型、上去型、去去型など高さの山が1語に複数現れる型）が現れていないことが注目される。例外は上去型となる22.「立浪」（唇内入声・次濁字「立」の高平調を上声と混同したもの）のみである。

仮名音注の観点からは、2.「窮（キウ）」6.「権（クヱム）」8.「城（セイ）」9.「精（セイ）」など漢音形を取るものが散見される（呉音と同形は含めず）。29.「駅（ヤク）子」のみ呉音形であり不審。『色葉字類抄』には和漢混種語の「ヤクコ」が掲げられており、本資料だけでは事情を詳らかにすることはできない。

このほか、15.「孤独（コトク）」23.「引率」27.「幹了（カンレウ）」は『色葉字類抄』に同じ声調型が掲げられており、本資料の差声と矛盾しない。

1.「窮（キウ）-民」平平 [早 262]（漢平呉去＋漢平呉去）
2.「経営」平平 [早 180]（漢平呉去＋漢平呉平）
3.「承前（セウゼン）」平平濁 [早 041]（漢平呉去＋漢平呉去）
4.「心神」平平濁 [早 020]（漢平呉去＋漢平呉去）

*1 楊守敬旧蔵本については貴重古典籍刊行会1955、真福寺本については古典保存会1924を用いた。

声調型	1+1	1+2	2+1	2+2	計
平平	1(1)			4(4)	5(5)
平平軽				2(2)	2(2)
平軽平				1(1)	1(1)
平上				1(2)	2(3)
平去			1(1)	1(1)	2(2)
平入		2(2)		1(1)	3(3)
平軽入		1(1)			1(1)
上平				1(1)	1(1)
上平軽		1(1)			1(1)
上上	2(2)		1(1)		3(3)
上去				1(1)	1(1)
上入軽		1(1)		1(1)	2(2)
去平	1(1)	1(1)		1(1)	3(3)
去上				1(1)	1(1)
入平				1(1)	1(1)
入軽上			1(1)		1(1)

表1　早大本　漢音漢語・拍数別分布

5.「綾羅（レウラ）」平平 [早 093]（㊥平㊀平＋㊥平㊀去）
6.「権公（クエムコウ）」平平軽 [早 023]（㊥平㊀去＋㊥平㊀平）
7.「民烟（エム）」平平軽 [早 084]（㊥平㊀去＋㊥平㊀去）
8.「専城（センセイ）」平軽平 [早 043]（㊥平㊀去＋㊥平㊀去）
9.「精好（セイカウ）」平上濁 [早 088] 平上濁 [早 092]（㊥平㊀去＋㊥上㊀平）
10.「厳制（イ）」平濁去 [早 256]（㊥平㊀去＋㊥去㊀去）
11.「刀-下」平去 [早 275]（㊥平㊀去＋㊥去㊀平）
12.「魚奪（キヨタツ）」平濁入 [早 262]（㊥平㊀去＋㊥入㊀入）
13.「疎略」平入 [早 183]（㊥平㊀去＋㊥平㊀平）
14.「當國」平入濁 [早 092]（㊥平㊀去＋㊥入㊀入）
15.「孤独（コトク）」平軽入 [早 169]（㊥平㊀去＋㊥入㊀入）〈平入コトク [㊁前上 11 オ 7]〉
16.「永延」上平 [早 242]（㊥上㊀平＋㊥平㊀平去）

17.「馬-風」上濁平軽 [早 278]（㊥上㊀平＋㊥平㊀去）
18.「不可」上上 [早 098]（㊥上㊀去＋㊥上㊀平）
19.「父子」上上 [早 157]（㊥上㊀平＋㊥上㊀平）
20.「往古（コ）」上上濁 [早 127]（㊥上㊀平＋㊥上㊀平）
21.「立浪」上去 [早 017]（㊥入㊀入＋㊥去㊀平）
22.「撫育（フイク）」上濁入軽 [早 021]（㊥上㊀平＋㊥入㊀入）
23.「引率」上入軽濁 [早 110]（㊥上㊀平＋㊥入㊀入）〈上入インソツ [㊐前上 12 ウ 4]〉
24.「世途」去平 [早 117]（㊥去㊀平＋㊥平㊀平）
25.「庶（ショ）人」去平濁 [早 240]（㊥去㊀去＋㊥平㊀去）
26.「散亡」去平濁 [早 252]（㊥去㊀平＋㊥平㊀平）
27.「幹了（カンレウ）」去濁上 [早 126]（㊥去㊀去＋㊥上㊀平）〈去濁上カンレウ [㊐前上 107 オ 4]〉
28.「役民」入平 [早 182]（㊥入㊀入＋㊥平㊀去）
29.「駅（ヤク）子」入軽上 [早 176]（㊥入㊀入＋㊥上㊀平）〈ヤクコ [㊐黒中 87 ウ 6]〉

4.2 呉音漢語

声調型	1+1	1+2	2+1	2+2	計
平平		3(3)	1(1)	4(5)	8(9)
平平軽			1(1)		1(1)
平上	1(1)	1(1)			2(2)
平入				1(1)	1(1)
平入軽		1(1)			1(1)
上平		3(3)			3(3)
上上	2(2)		1(1)		3(3)
去平		3(3)	5(5)	4(4)	12(12)
去上			2(2)	2(2)	4(4)
去入				1(1)	1(1)

表 2　早大本　呉音漢語・拍数別分布

呉音漢語と認定したものは 31(32) 例となる。表 2 から見てとれるのは、まず漢音漢語に比べて語頭去声が多く非語頭去声がないことであるが、上声と去声の

語環境（語頭・非語頭、拍数）ごとの現れ方が呉音の性格に則っていることについては旧稿にて報告した。

仮名音形から呉音であることが保証されるものに、9.「逓」35.「刑罰」（『色葉字類抄』では漢音形が掲げられるが、両形あったのだろう）37.「職掌」が挙げられる（漢呉同形は含めず）。仮名音形から漢音が期待されるものは上述の 20.「救」13.「却」が挙げられる。20.「思救」去平を呉音漢語とみなしたのは、呉去＋呉平の組み合わせに基づくが、仮名音形漢音を重くみれば中低型回避のための去去＞去平を想定しなければならなくなる。この想定については以下の項や条でも適宜触れながら、7. 節で取りまとめて考察する。

このほか、5.「用途」17.「非理」33.「将来」37.「職掌」（軽声を捨象すれば）は『色葉字類抄』に同じ声調型が掲げられており、本資料の差声と矛盾しない。

1.「所-在」平平濁 [早 190]（漢上呉平＋漢去呉平）
2.「負累」平平 [早 128]（漢上呉平＋漢上呉平）
3.「鄙悋」平平 [早 171]（漢上呉平＋漢去呉平）
4.「愛子」平平軽 [早 115]（漢去呉平＋漢上呉平）
5.「用途」平平濁 [早 058]（漢去呉平＋漢平呉平）〈平平濁ヨウト [色前上 117 ウ 3]〉
6.「見任」平濁平濁 [早 235]（漢去呉平＋漢平呉平）
7.「税帳」平平 [早 008]（漢去呉平＋漢去呉平）
8.「損害」平平濁 [早 214]（漢上呉平＋漢去呉平）
9.「逓送」平平 [早 180]「逓送」平平 [早 198]（漢上呉平＋漢去呉平）
10.「自余」平濁上 [早 108]（漢去呉平＋漢平呉去）
11.「利稲」平上 [早 054]（漢去呉平＋漢上呉平）
12.「検牧」平入濁 [早 181]（漢上呉平＋漢入呉入）
13.「解却」平入軽 [早 235]（漢上呉平＋漢入呉入）
14.「移住」上平濁 [早 018]（漢（漢平呉平去＋漢去呉平）
15.「把分」上平濁 [早 196]（漢上呉平去＋漢去呉平）
16.「離散」上平 [早 085]（漢平呉去＋漢去呉平）
17.「非理」上上 [早 224]（漢平呉去＋漢上呉去）〈去平ヒリ [色前下 98 ウ 3]〉
18.「不-治」上上濁 [早 271]（漢上呉去＋漢去呉去）
19.「鳥-枝」上上 [早 278]（漢上呉去＋漢平呉去）
20.「思救」去平 [早 163]（漢去呉去＋漢去呉平）

21.「私用」去平 [早 093]（㊥平㊧去＋㊥去㊧平）
22.「私乱」去平 [早 249]（㊥平㊧去＋㊥去㊧平）
23.「堅固」去平濁 [早 170]（㊥平㊧平去＋㊥去㊧平）
24.「新古」去平 [早 120]（㊥平㊧去＋㊥上㊧平）
25.「制止」去平 [早 230]（㊥去㊧去＋㊥上㊧平）
26.「例擧」去平 [早 004]（㊥去㊧去＋㊥上㊧平）
27.「貪利」去平 [早 116]（㊥平㊧平去＋㊥去㊧平）
28.「官法」去平濁 [早 035]（㊥平㊧去＋㊥入㊧入）
29.「残害」去濁平濁 [早 229]（㊥平㊧平去＋㊥去㊧平）
30.「従類」去濁平 [早 111]（㊥去㊧去＋㊥去㊧平）
31.「田畠」去濁平 [早 206]（㊥平㊧去＋㊥平㊧平）
32.「臨時」去上濁 [早 058]（㊥平㊧去＋㊥平㊧平）
33.「将来」去上 [早 200]（㊥平㊧去＋㊥平㊧去）〈去上シヤウライ [㊫前下 80 ウ 6]〉
34.「兵杖」去上濁 [早 230]（㊥平㊧去＋㊥上㊧去）
35.「刑罰」去濁入軽濁 [早 228]（㊥平㊧去＋㊥入㊧入）〈ケイハツ [㊫黒中 99 ウ 3]〉
36.「息-利」入平 [早 005]（㊥入㊧入＋㊥去㊧平）
37.「職掌」入軽平軽 [早 254]（㊥入㊧入＋㊥上㊧平）〈入平シキシヤウ [㊫前下 84 オ 4]〉

4.3　字音系統が不明の漢語

字音系統が不明とした漢語は 55(57) 例である。これらは第 1 字か第 2 字を上述の呉音系字音資料に見つけることができなかったものであって、厳しい基準のために漢音漢語・呉音漢語の別を保留したグループとも言える。したがって呉音情報が分からなくとも、漢音声調だけで見れば、5.「荒蕪」6.「農夫」8.「天朝」9.「冤凌」12.「綸-旨」13.「霖雨」14.「江-海」15.「蓬叟」29.「准頷」35.「万-機」40.「調庸」などは漢音漢語である可能性は高い。38.「境程」なども、「境」が『大慈恩寺三蔵法師伝』鎌倉初期点にケイ去声とある（佐々木勇 2009b）ことからすれば漢音漢語と言えるかもしれない。これらのうち、12.13.14.35.40 は『色葉字

声調型	1+1	1+2	2+1	2+2	計
平平	2(2)	2(2)	1(1)	3(3)	8(8)
平軽平				1(1)	1(1)
平平軽			1(1)		1(1)
平上	1(1)		2(2)	2(2)	5(5)
平軽上		1(1)		1(2)	2(3)
平去				1(1)	1(1)
平入		2(2)		1(1)	3(3)
平軽入	1(1)			1(1)	2(2)
平入軽		1(1)		1(1)	2(2)
平軽入軽		1(1)		1(1)	2(2)
上平			1(1)	2(2)	3(3)
上上				1(1)	1(1)
上去		1(1)			1(1)
上入軽		1(1)		1(2)	2(3)
去平		1(1)	2(2)	4(4)	7(7)
去平軽		1(1)		1(1)	2(2)
去上		2(2)	3(3)		5(5)
去入軽				3(3)	3(3)
入平			1(1)	1(1)	2(2)
入軽上				2(2)	2(2)

表3　早大本　字音系統不明漢語・拍数別分布

類抄』に同じ声調型が記載され、本資料の差声と矛盾もしない*2。呉音漢語についても、仮名音注に注目すれば、1.「貢御（コ）」2.「貢馬（メ）」3.「貢朝（ク）」11.「封家（フケ）」42.「功粮（クラウ）」などが可能性ありと考えられるし、声調情報とも矛盾しない。

これらを除外しても、なお39(41)例が不明として残る。これらのうち、前条にて触れた中低型回避のための変化を想定するものが、19.「賄賂」20.「虜掠（リヨリヤウ）」21.「両収」の3例である。この3例は上平型を取るが、漢音の声調に従えば上去型となるべきものである。特に20.は『将門記』においても上平型で現れなが

*2 9.「冤凌（エンレウ）」が『色葉字類抄』にて上濁平ヘンレウ [㊀前上53オ6] となることは、「冤」を「免」（広韻上声・明母）と誤ったためと考えられる。

ら、『色葉字類抄』では上去型で現れる。この揺れについて、『色葉字類抄』を原音の規範に忠実な型、本資料および『将門記』を規範から離れた型と考えるわけである。

中低型回避という観点で異例となるのは、軽声点を交える 16.「家薗（エム）」17.「褒賞（ホウシヤウ）」27.「衣食」28.「誅-戮（チウ リク）」の 4 例である。これらの解釈は和化漢文における軽声の実現音調とも関わる*3が、ひとまず声調型のレベルの分類として表に掲げている。

このほかについても、個別例を他資料と比較しなければその事情を判断できないので今は保留とし、用例を掲げるにとどめる。

1.「貢御（コ）」平濁平濁 [早 181]（㊥去㊀不＋㊥去㊀平）
2.「貢馬（メ）」平濁平 [早 183]（㊥去㊀不＋㊥上㊀平）〈クメ [㊉黒中 80 オ 2]〉
3.「貢朝（ク）」平濁平 [早 052]（㊥去㊀不＋㊥平㊀不）
4.「租税」平平 [早 028]（㊥平㊀不＋㊥去㊀平）
5.「荒蕪（クワウ フ）」平平濁 [早 062]（㊥平㊀不＋㊥平㊀不）
6.「農夫」平平軽 [早 051]（㊥平㊀不＋㊥平㊀去）
7.「蹄（リヤウ/レイ）　跰（ヒヤウ/ヘイ）」平平 [早 164]（㊥去㊀不＋㊥平㊀不）
8.「天朝」平軽平 [早 117]（㊥平㊀去＋㊥平㊀不）
9.「冤凌（エムレウ）」平平 [早 129]（㊥平㊀不＋㊥平㊀不）〈上濁平ヘンレウ [㊉前上 53 オ 6]〉
10.「孀-嫗（サウ/ク）」平平 [早 169]（㊥平㊀不＋㊥去㊀不）
11.「封家（フ ケ）」平上濁 [早 240]（㊥平㊀不＋㊥平㊀去）
12.「綸-旨（シ）」平上 [早 279]（㊥平㊀不＋㊥上㊀去）〈平去 [㊉前上 74 ウ 6]〉
13.「霖雨（リン ウ）」平上 [早 213]（㊥平㊀不＋㊥上㊀去）〈平上リムウ [㊉前上 74 ウ 1]〉
14.「江-海」平濁上 [早 275]（㊥平㊀平＋㊥上㊀平去）〈平上カウカイ [㊉前上 106 ウ 6]〉
15.「蓬叟（ホウソウ）」平上 [早 169]（㊥平㊀平＋㊥上㊀不）
16.「家薗（エム）」平軽上 [早 253]（㊥平㊀去＋㊥平㊀不）
17.「褒賞（ホウシヤウ）」平軽上 [早 151][早 278]（㊥平㊀不＋㊥上㊀去）〈上平/上上ホウシヤウ [㊉前 48 オ 3]、平○ホウ○ [㊋楊 52-4]〉

*3 稿者は、平声軽音節が、漢籍学習の場など外国語としての高い規範性が要求される場で発音される際に下降を伴ったとしても、それがただちに和語アクセント型を担えるような下降拍＝高下りとして実現したかどうかには、留保が必要であると考えている（加藤大鶴 2008）。

18.「劉寛（リウカン）」平去 [早 046]（㊥平㊀不＋㊥平㊀不）
19.「賄賂」上平 [早 183]（㊥上㊀不＋㊥去㊀不）〈上〇ワイロ [㊐前上 90 オ 2]〉
20.「虜掠（リヨリヤウ）」上平 [早 016]（㊥上㊀不＋㊥去㊀平）〈上去リヨリヤウ [㊐前上 75 オ 7]、上平 [㊗楊 32-7]〉
21.「両収」上平 [早 179]（㊥上㊀平＋㊥去㊀不）
22.「供給」平入濁 [早 077][早 182]（㊥平㊀平＋㊥入㊀入）〈クキウ [㊐黒中 81 オ 1]〉
23.「任国」平入 [早 236]（㊥平㊀平＋㊥入㊀入）
24.「沽却」平入軽 [早 114]（㊥平㊀不＋㊥入㊀入）
25.「裁恤（シユツ）」平入軽 [早 155]（㊥平㊀不＋㊥入㊀入）
26.「天蘖（エウケキ）」平軽入濁 [早 025]（㊥平㊀不＋㊥入㊀入）
27.「衣食」平軽入軽 [早 212]（㊥平㊀平去＋㊥入㊀入）
28.「誅-戮（チウ リク）」平軽入軽 [早 264]（㊥平㊀不＋㊥入㊀入）
29.「准頴（エイ）」上濁上 [早 189]（㊥上㊁不＋㊥上㊁不）
30.「蒲-鞭（ヘム）」上去 [早 263]（㊥平㊀不＋㊥平㊀平去）
31.「輔弼（フ ヒツ）」上入軽 [早 009]（㊥上㊀不＋㊥入㊀入）〈去入ホヒツ [㊐前上 47 ウ 2]〉
32.「減-直」上濁入軽濁 [早 082][早 088]（㊥上㊁平去＋㊥入㊁入）
33.「私謀（ハウ）」去平濁 [早 058]（㊥平㊀去＋㊥平㊀不）
34.「官府」去平濁 [早 242]（㊥平㊁去＋㊥上㊁不）
35.「万-機（キ）」去濁平 [早 273]（㊥去㊀平＋㊥平㊀不）〈去濁平ハンキ [㊐前上 31 ウ 7]〉
36.「改-任」去濁平 [早 276]（㊥上㊀不＋㊥平㊀平）
37.「官-裁」去平濁 [早 271]（㊥平㊀去＋㊥平㊀不）
38.「境程（ケイテイ）」去平 [早 020]（㊥上㊀不＋㊥平㊀不）
39.「愁吟」去平濁 [早 087]（㊥平㊀平去＋㊥平㊀不）
40.「調庸（テウヨウ）」去濁平軽 [早 234]（㊥去㊀去＋㊥平㊀不）〈去上テウヨウ [㊐前下 23 オ 7]〉
41.「衣裳（シヤウ）」去上濁 [早 115]（㊥平㊀平去＋㊥平㊀不）〈上平イシヤウ [㊐前上 13 ウ 6]〉
42.「功粮（ク ラウ）」去上 [早 176]（㊥平㊀去＋㊥平㊀不）
43.「嬛寡（クワンクハ）」去上 [早 169]（㊥平㊀不＋㊥上㊀去）

44.「前司」去上濁 [早 239]（漢平呉去＋漢平呉不）
45.「濫-絲」去上 [早 265]（漢去呉不＋漢平呉不）
46.「憲法」去入軽濁 [早 259]（漢去呉不＋漢入呉入）
47.「盗賊」去入軽濁 [早 231]（漢去呉去＋漢入呉入）
48.「鳳-厥」去入軽 [早 279]（漢去呉不＋漢入呉入）
49.「合期」入濁平濁 [早 234]（漢入呉入＋漢平呉不）
50.「執鞭」入平 [早 255]（漢入呉入＋漢平呉平去）
51.「陸海」入軽上 [早 231]（漢入呉入＋漢上呉平去）
52.「率-稲」入軽上 [早 056]（漢入呉入＋漢上呉去）

4.4　漢音呉音の混読漢語

声調型	1+1	1+2	2+1	2+2	計
平平		1(1)		1(1)	2(2)
平上			1(1)		1(1)
平去	1(1)	1(1)		1(1)	3(3)
上平		1(2)		1(1)	2(3)
上上		1(2)		1(1)	2(3)
上去		1(1)			1(1)
去上			1(1)		1(1)
去去		1(1)			1(1)

表 4　早大本　漢呉混読漢語・拍数別分布

漢音呉音の混読漢語に含めたものは 13(15) 例である。2.「彫弊」は『色葉字類抄』と声調型が一致する。6.「徘徊」については『色葉字類抄』と一致しない（『色葉字類抄』の平平は漢音漢語と認められる）。「徊」は仮名音形漢音なので漢音声調が期待されるところではある。9.「離散」（中低型）については本資料内に異なる声調型で現れるが 7. 節にて取り扱うこととする。

5.「利潤」の平去濁は真福寺本にも同声調型として現れる。もしこれが漢音漢語だとすると去去＞平去の変化を想定しなければならない。この想定についても去去＞去平と同様、以下の項や条でも適宜触れながら、7. 節で取りまとめて考察する。

11.「屠膾」が去去型は中低型となっており、漢語単位としての差声が疑われ

る例である。

1.「負名」平平 [早 124]（㊥上㊧平＋㊥平㊧去）
2.「彫弊」平平 [早 131]（㊥平㊧去＋㊥去㊧平）〈平平テウヘイ [㊐前下 22 オ 1]〉
3.「林-阿」平上 [早 276]（㊥平㊧去＋㊥平㊧平去）
4.「死去」平去 [早 124]（㊥上㊧平＋㊥去㊧平）
5.「利潤」平去濁 [早 022]（㊥去㊧平＋㊥去㊧平）
6.「徘徊」平去 [早 184]（㊥平㊧去＋㊥平㊧去）〈平平ハイクワイ [㊐前上 33 オ 6]〉
7.「土毛」上上 [早 138][早 149]（㊥上㊧平＋㊥上㊧平）〈平濁上トモ [㊐前上 62 オ 3]〉
8.「永財」上上濁 [早 114]（㊥上㊧平＋㊥平㊧去）
9.「離散」上去 [早 269]（㊥平㊧去＋㊥去㊧平）
10.「官使」去上濁 [早 176]（㊥平㊧去＋㊥上㊧平）
11.「屠膾」去去 [早 018]（㊥平㊧去＋㊥去㊧平）

4.5　その他

声調型	1+1	1+2	2+1	2+2	計
平上	1(1)	1(1)			2(2)
平去			1(1)	1(1)	2(2)
上平			1(1)	1(1)	2(2)
上上			1(1)		1(1)
去平		1(1)	1(1)		2(2)
去平軽		1(1)			1(1)
去上		1(1)			1(1)
入上				1(1)	1(1)

表 5　早大本　その他・拍数別分布

その他に含めたのは 12(12) 例である。1.「事状」2.「所為」12.「国例」の非語頭上声字は呉音去声の変化と考えるべきか。8.「公用」は仮名音形から呉音声調が期待されるところだが、声調型と合わない。5.「永代」の上平型はもし漢音

漢語だとすれば、上去>上平を想定する必要がある。

1.「事状」平濁上濁 [早 280]（㊥去㊤平＋㊥去㊤去）
2.「所為」平上 [早 083]（㊥上㊧平＋㊥去㊧去）
3.「財産」平去 [早 252]（㊥平㊧去＋㊥上㊧平）
4.「蚤婦（サウフ）」平去 [早 051]（㊥去㊧平＋㊥上㊧平）
5.「永代」上平濁 [早 252]（㊥上㊧平＋㊥去㊧去）
6.「数所」上平 [早 253]（㊥去㊧平＋㊥上㊧平）
7.「数多」上上 [早 110]（㊥去㊤平＋㊥平㊤去）
8.「公用（クヨウ）」去平 [早 058]（㊥平㊧平＋㊥去㊧平）
9.「先祖」去平濁 [早 114]（㊥平㊧去＋㊥上㊤去）
10.「他州」去平軽 [早 061]（㊥平㊧不＋㊥平㊧HL*4）＊
11.「土毛（モウ）」去上 [早 077]（㊥上㊤平＋㊥上㊤平）〈平濁上トモ [㊀前上 62 オ 3]〉
12.「国例」入上 [早 219]（㊥入㊧入＋㊥去㊧去）

5　東大本

5.1　漢音漢語

声調型	1+1	1+2	2+1	2+2	計
平平				1(1)	1(1)
平軽平			1(1)		1(1)
平軽入				1(1)	1(1)
去平				2(2)	2(2)
去上				1(1)	1(1)
去入				1(1)	1(1)

表 6　東大本　漢音漢語・拍数別分布

漢音漢語と認めたものは 7(7) 例である。うち、4.「乱入」の「入」（唇内入声字・日母）は LL に実現されたため、平声と誤ったものと考えられる。

1.「窮民」平平 [東 223]（㊥平㊧去＋㊥平㊧去）
2.「卿中-花」平軽平 [東 402]（㊥平㊤去＋㊥平㊤去）

*4 「州」は『観智院本類聚名義抄』でシ [上] ウ [平] とある。

3.「補災藥」平軽入濁 [東 394]（漢平呉去＋漢入呉入）
4.「乱入」去平 [東 346]（漢去呉平＋漢入呉入）〈ランニウ [色黒中 41 ウ 2]〉
5.「練行」去平 [東 270]（漢去呉去＋漢平呉去）
6.「大友」去上 [東 310]（漢去呉平＋漢上呉平去）
7.「補外国」去濁入 [東 402]（漢去呉平＋漢入呉入）

5.2 呉音漢語

声調型	1+1	1+2	2+1	2+2	計
平平		1(1)	1(1)	2(2)	4(4)
上平		1(1)			1(1)
上上	1(1)				1(1)
上入		1(1)			1(1)
去平				1(1)	1(1)
去上			1(1)		1(1)
去平軽				2(2)	2(2)

表 7　東大本　呉音漢語・拍数別分布

呉音漢語と認めたものは 11(11) 例である。表 7 から見てとれるのは、上声が語頭環境かつ 1 拍字にのみ集中していることであるが、上声と去声の語環境（語頭・非語頭、拍数）ごとの現れ方が呉音の性格に則っていることについては、早大本と同様に旧稿にて報告した。

2.「講演」は『色葉字類抄』に同じ声調型が掲げられている。5.「飢寒」は本資料で上平であるに対し、『色葉字類抄』では去平である。これは呉音における 1 拍去声の上声化が時代が下るにつれてより進んだことの反映と見ることができるだろう。

1.「貝進」朔平朔平 [東 016]（漢去呉平＋漢去呉平）
2.「講演」平平 [東 261]（漢上呉平＋漢上呉平）〈平平カウエン [色前上 107 オ 3]〉
3.「散亡」平平 [東 381]（漢去呉平＋漢平呉平）
4.「分附」朔平朔平 [東 040]（漢平呉平＋漢去呉平）
5.「飢寒」上平 [東 211]（漢平呉去＋漢平呉平）〈去平キカン [色前下 62 ウ 3]〉

6.「五家」上濁上 [東 325]（㊥上㊀平去＋㊥平㊀去）
7.「㊀魚奪」上濁入濁 [東 392]（㊥平㊀去＋㊥入㊀入）
8.「㊀芥」去平 [東 355]（㊥平㊀去＋㊥去㊀平）
9.「官物」去入軽 [東 333]（㊥平㊀去＋㊥入㊀入）
10.「人物」去入軽 [東 347]（㊥平㊀去＋㊥入㊀入）

5.3　字音系統が不明の漢語

声調型	1+1	1+2	2+1	2+2	計
平上	1(1)		1(1)		2(2)
平去				2(2)	2(2)
上平	1(1)		1(1)		2(2)
去平				2(2)	2(2)
去上	1(1)			2(2)	3(3)
去入				1(1)	1(1)

表 8　東大本　字音系統が不明の漢語・拍数別分布

字音系統が不明とした漢語は 12(12) 例である。これらも早大本と同様に漢音声調だけで判断すれば、1.「亡残」2.「鮜鯆」7.「㊀蟲虫」は漢音漢語と認められる可能性は高い。なお 2. は本資料の平上型に対し『色葉字類抄』では平平型であるが、『色葉字類抄』を不審例と考えたい。

6.「熙怡」上平が真福寺本『将門記』に上去とあるについては、本資料の上平型が中低型である上去を回避したものと考えられないだろうか。「熙」は広韻では平声だが、久遠寺蔵『本朝文粋』鎌倉中期点にキ上声とあり（佐々木勇 2009b）、漢音上声を認めることができれば、漢音声調上去＞上平の例となる。このほか 4.「運賃」の平去型も漢音漢語であるとすれば、去去＞平去が想定される。

また 3.「院宮」は第 2 字の声調情報・仮名音形が呉音であることから、呉音漢語である可能性がある。これら 5(5) 例を除いても、7(7) 例は字音系統が不明なものとして残る。

1.「亡残」平濁平 [東 214]（㊥平㊀平＋㊥平㊀平去）
2.「鮜鯆」平上濁 [東 203]（㊥平㊀＋㊥上㊀不）〈平平フホ [㊁前上 4 ウ 7]〉
3.「院宮」平上濁 [東 373]（㊥去㊀不＋㊥平㊀去）

4.「運賃（ツンチム）」平去 [東 226]（㊥去㊧不＋㊥去㊧平）
5.「喟然（キセム）」上平濁 [東 213]（㊥去㊧不＋㊥平㊧去）
6.「煕怡（キイイ）」上㊀平 [東 212]（㊥平㊧不＋㊥平㊧不）〈上去キイ [㊐真 5-1]〉
7.「補蠱虫（コチウ）」上平 [東 398]（㊥上㊧去＋㊥平㊧平）
8.「官裁」去平 [東 199]（㊥平㊧去＋㊥平㊧不）
9.「補皇命（ワウメイ）」去平 [東 396]（㊥平㊧不＋㊥去㊧平去）
10.「交替（ケウタイ）」去上 [東 328]（㊥平㊧去＋㊥去㊧不）
11.「行操（カウサウ）」去上 [東 310]（㊥平㊧去＋㊥去㊧不）
12.「市夫（シフ）」去上 [東 309]（㊥上㊧不＋㊥平㊧去）

5.4　漢音呉音の混読漢語

声調型	1+1	1+2	2+1	2+2	計
平去				2(2)	2(2)
去平	1(1)			2(2)	3(3)

表 9　東大本　漢呉音混読漢語・拍数別分布

漢音呉音の混読漢語に含めたものは 5(5) 例である。このうち 4.「進退」の去平型は、中低型回避のための漢音声調去去＞去平の変化が想定される。仮名音形などの判断材料がないので、蓋然性をはかることはできないが、『色葉字類抄』に同じ声調型が掲げられており、誤記の類ではないと考えられよう。

1.「経廻」平去濁 [東 352]（㊥平㊧去＋㊥平㊧去）
2.「才行（㊐キヤウ）」平去 [東 276]（㊥平㊧去＋㊥平㊧去）
3.「舊領」去平 [東 319]（㊥去㊧平＋㊥上㊧平）
4.「進退」去平濁 [東 210]（㊥去㊧平＋㊥去㊧平）〈去平濁シンタイ [㊐前下 83 ウ 5]〉
5.「世路」去平 [東 211]（㊥去㊧平＋㊥去㊧平去）

5.5　その他

その他に含めたのは 5(5) 例である。このうち 4.「久年」は第 1 字が『大慈恩寺三蔵法師伝』鎌倉初期点に去声とあり、漢音去声を認めることができれば漢音漢語となる。5.「奉公」は第 1 字が広韻で全濁字であり、旧稿では全濁上声字の去

声調型	1+1	1+2	2+1	2+2	計
平平				1(1)	1(1)
上平				2(2)	2(2)
去平				1(1)	1(1)
去平軽				1(1)	1(1)

表 10　東大本　その他・拍数別分布

声化例と認めた。作業の手順上このグループに含めたが、漢音漢語として問題ないだろう。

なお、2.「碗飯（ワウリウ）」4.「久年」5.「奉公」は『色葉字類抄』に同じ声調型が掲げられており、本資料の差声と矛盾しない。

1.「筇杖（クウチヤウ）」平平 [東 235]（㊥平㊀不＋㊥上㊀去）
2.「碗飯（ワウリウ）」上平濁 [東 352]（㊥去㊀不＋㊥去㊀去）〈上平濁ワウハン [㊁前上 88 オ 3]〉
3.「遼遠（リヨウエム）」上平 [東 232]（㊥平㊀不＋㊥上㊀去）
4.「久年」去平 [東 335]（㊥上㊀平＋㊥平㊀平去）〈去平キウネン [㊁前下 60 ウ 7]〉
5.「奉公」去平軽 [東 212]（㊥上㊀平＋㊥平㊀平）〈去平ホウコウ [㊁前上 47 ウ 3]〉

6　真福寺本

以下、真福寺本の漢語例は少ないので、認定ごとに表を掲げないことにする。

6.1　漢音漢語

漢音漢語と認定したのは 3(3) 例である。1.「狂-心」2.「山-川」の第 2 字に連濁が生じていることは旧稿にて報告した。

1.「狂-心」平平濁 [真 279]（㊥平㊀平＋㊥平㊀去）
2.「山-川」平平濁 [真 008]（㊥平㊀去＋㊥平㊀去）
3.「千-流」平平 [真 210]（㊥平㊀去＋㊥平㊀去）

6.2　呉音漢語

呉音漢語と認定したのは 1(1) 例のみである。

1.「擔-夫」平上 [真 370]（漢平呉平＋漢平呉去）

6.3　字音系統が不明の漢語

字音系統が不明とした漢語は 6(6) 例である。6.「轆-轤」のみ『色葉字類抄』に同じ声調型が掲げられている。1.「運-賃」の平去が漢音漢語ならば、これも去去＞平去の変化が想定される。

1.「運-賃」平去 [真 350]（漢去呉不＋漢去呉平）
2.「稼-穡」平入 [真 208]（漢去呉不＋漢入呉入）
3.「藝-業」平入軽濁 [真 327]（漢去呉不＋漢入呉入）
4.「官-裁」去平 [真 080]（漢平呉去＋漢平呉不）
5.「愁-吟」去平濁 [真 281]（漢平呉平去＋漢平呉不）
6.「轆-轤」入上 [真 350]（漢入呉入＋漢平呉不）〈入上ロクロ [色前上 18 オ 4]〉

6.4　漢音呉音の混読漢語

漢音呉音の混読漢語に含めたのは 2(2) 例である。2.「利潤」は漢音漢語だとすれば去去＞平去が想定される。

1.「万-河」去濁上濁 [真 211]（漢去呉平＋漢平呉去）
2.「利潤」平去濁 [真 262]（漢去呉平＋漢去呉平）

6.5　その他

その他に含めたのは 3(3) 例である。1.「調備」は第 2 字が広韻で全濁字であり、旧稿では全濁上声字の去声化例と認めた。作業の手順上このグループに含めたが、漢音漢語として問題ないだろう。『色葉字類抄』の声調型とも一致する。

1.「調備」平上濁 [真 259]（漢去呉去＋漢去呉平）〈平上テウヒ [色前下 23 オ 1]〉
2.「亡-残」去濁平濁 [真 334]（漢平呉平＋漢平呉平去）
3.「廣-深」去平 [真 211]（漢上呉平＋漢平呉去）

7　中低型回避の方法

以上、三本に現れる二字漢語の声調型について分析を行ってきた。漢音漢語、呉音漢語と分類したものについては、中には仮名音形からも分類が支持される例も認められ、おおむね問題はないと考えられる。その他に分類したものの中にも、漢音漢語、呉音漢語と特定できる可能性のあるものも認められた。なお、これらを単なる字音の連接ではなく漢語であるとみなす根拠は、中低型がほとんど現れていない点に求めることができるだろう。中低型が現れ得るのは、呉音を議論の外に措くとすると、漢音の去声＋去声および上声＋去声が連接する場合、および平声軽に平声軽、上声、去声が後接する場合である。本稿の分析では、単字声調の単純な連接や先行研究から知られる声調変化から整合的に解釈されるものに限り、呉音漢語、漢音漢語に分類したのであり、そうでないものは作業手順上異なるグループに分け、個別的な言及を加えてきた。ここで中低型回避が疑われるものを、改めて整理し考察したい。

前節に掲げた全ての例から漢音の単字声調で上声＋去声となるものを抜き出すと、13(13) 例となる。このうち 8(8) 例は呉音漢語と説明できるので、残り 5(5) 例が問題となる。いま改めてこれらを以下に抜き出して掲げる。

1. 「死去」平去 [早 124]（㊥上㊧平＋㊥去㊧平）
2. 「永代」上平濁 [中 252]（㊥上㊧平＋㊥去㊧去）
3. 「賄賂」上平 [早 183]（㊥上㊧不＋㊥去㊧不）〈上〇ワイロ [㊐前上 90 オ 2]〉
4. 「両収」上平 [早 179]（㊥上㊧平＋㊥去㊧不）
5. 「虜掠（リヨリヤウ）」上平 [早 016]（㊥上㊧不＋㊥去㊧平）〈上去リヨリヤウ [㊐前上 75 オ 7]、上平 [㊙楊 32-7]〉

このうち、1.「死去」平去は本稿の範囲では漢音呉音混種語の疑いありとして除けば、残りは上去＞上平と考えられるものだけである。この変化が生じたことを支持するデータとして『色葉字類抄』に上去型が現れることはすでに述べたとおりである。また漢音漢語に生じているかどうかを別とすれば、「離散」に上平 [早 085] と上去 [早 269]、「熙怡（キイ）」上㊀平 [東 212] が『将門記』に上去キイ [㊙真 5-1] と、各々 2 つの声調型が現れることもこの変化を支持する可能性がある。

また、同様に漢音の単字声調で去声＋去声となるものを抜き出すと、11(13) 例となる。このうち 5(5) 例を呉音漢語と説明できるので、残り 6(8) 例が問題となる。これらも改めて以下に掲げる。

1.「利潤」平去濁 [早 022] 平去濁 [真 262]（㊥去㊀平＋㊥去㊀平）
2.「碗飯」上平濁 [東 352]（㊥去㊀不＋㊥去㊀去）〈上平濁ワウハン [前上 88 オ 3]〉
3.「運賃」平去 [東 226]「運-賃」平去 [真 350]（㊥去㊀不＋㊥去㊀平）
4.「調備」平上濁 [真 259]（㊥去㊀去＋㊥去㊀平）〈平上テウヒ [㊐前下 23 オ 1]〉
5.「思救」去平 [早 163]（㊥去㊀去＋㊥去㊀平）
6.「進退」去平濁 [東 210]（㊥去㊀平＋㊥去㊀平）〈去平濁シンタイ [㊐前下 83 ウ 5]〉

このうち 2.「「碗飯」上平濁については本稿の範囲では説明ができないので保留すると、残りは去去＞平去が想定されるもの 2(4) 例、同じく平上への変化が想定されるもの 1(1) 例、去平への変化が想定されるもの 2(2) 例となる。これらの変化に共通するのは、去声＝上昇調の低く始まる音調上の特徴を残して[*5]中低型を回避している点である。さらに拍レベルで見ればこれらの変化は次の 2 種類に分けられる。

去去＞去平　R/LH ＞ R/LL、LH/LH ＞ LH/LL　…2(2) 例
去去＞平上（平去）　R/LH ＞ L/LH、LH/R ＞ LL/H、LH/LH ＞ LL/LH　…3(5) 例

1 つは語頭に上昇を残すパタン、もう 1 つは語末に上昇を残すパタンである。前者は語頭に字音の去声（拍数を問わず）を残す。後者は和語アクセントの複合傾向に似ている[*6]。また先に述べた上去＞上平も和語アクセントの複合としてはあり得るパタンである[*7]。和化漢文の漢音を対象とした先行研究で言われる、「去声字は去声・上声に続く際に上声化しやすい」（佐々木勇 2009a:pp.730-732）傾向が本資料とは一致せず、むしろ和語アクセントの傾向に一致するのは、本資料の漢音漢語がより和語アクセントに近い捉えられ方をしていたためではないかと

*5 字音単位では平声と去声で異なるが、低く始まるという点では同じである。これはいわゆる金田一法則「ある語が高く始まるならば、その派生語・複合語もすべて高く始まり、ある語が低く始まるならば、その派生語・複合語もすべて低く始まる」（金田一春彦 1953）にも合う。
*6 特に 2 拍名詞＋2 拍名詞の複合語アクセントには、前部成素が低起式、後部成素が擡頭型○●のものはその高さを保って○○○●になる傾向が強いとされる（秋永一枝 1980:p.156）。
*7 ただし傾向というほどではない。秋永一枝 1980:pp.159-163 に掲げられる例では、HH/LH の条件で HHHH、HHHL、HHLL などの型がある。

考えられる。

8　おわりに

以上、和化漢文の二字漢語への差声を分析することで分かったことをまとめる。

1. 字音系統を継承するものとそうでないものがある。
2. 字音系統を継承するものとそうでないもの、共に他資料に同じ差声を確認できるが、なかには他資料に異なる差声を確認できるものもあった。
3. 中低型が非常に少ない。
4. 漢音漢語と思しきものに、従来報告されるのとは異なるパタンの、中低型を回避した差声が見られる。

1. の結果は和化漢文が漢籍や仏典などの原音指向性の高い文献とは異なることを示すもので、旧稿の報告の延長上に位置するものとなる。2. は当然と言えば当然の結果だが、本資料に現れる差声にはある程度固定的なものと臨時的で散発的なものとがあることを意味する。とりわけ字音系統を継承しないものにも固定的と推測される例が含まれることは、後代の漢語アクセントとの史的なつながりを考える上で重要と考える。3. は、本資料に現れる差声が漢語単位のものであることを示すものと考える。早大本に現れた平声軽を含む中低型 4(5) 例についても、平声軽自体の具体的な実現音調の問題は残るが、全体からみればやはり中低型としては少ない。

4. の結果は本資料にのみ見られる傾向なのか、和化漢文に広く見られる資料位相的な傾向なのか慎重に取り扱わなければならないが、従来言われる去去（上去）＞去上とは異なる変化が生じたことは、漢語への差声が声調としての把握なのかアクセントとしての把握なのかを考える上での、重要な視点となるのではないかと考える。

なお、単字声調で呉音の去声＋去声についても去平、平去が数例見られるものの、漢音漢語とは異なるいわゆる連音上の変化、上去＞上上、去去＞去上の変化が多数を占めるために、はっきりとした傾向を見てとることができなかった。本資料の漢語への差声には、古い時代に複合したものと新しい時代に複合したもの、さらには声調としての把握とアクセントとしての把握なども混在していると考えるのが自然であろう*8から、分析には語史や語性なども併せて考える必要な

*8 たとえば「土毛（ドウ）」という語に対して、本資料では上上 [早 149]、去上 [早 077] と揺れがあるのに対し、『色葉字類抄』には低く始まる特徴を反映した平濁上トモ (⑯前上 62 オ 3) が現れる

ども出てくるだろう。これは程度の違いはあれ漢音漢語についても同じである。他資料との比較などを通じて、機会を改めてこの問題を取り扱ってみたい。

（参考文献）

秋永一枝 1980『古今和歌集声点本の研究　研究篇上』校倉書房
浅野敏彦 1985「『将門記』の漢字とことば―『和漢朗詠集』との比較を中心に―」（佐藤喜代治編『漢字講座 5　古代の漢字とことば』明治書院所収）
梅村喬・水野柳太郎 1980「尾張国解文解説」（『新修稲沢市史　資料編三尾張国解文』新修稲沢市史編纂会事務局所収）
加藤大鶴 2008「字音平声軽音節の音調についての試案―和語下降拍からの検討―」国文学研究 153・154 合併号
加藤大鶴 2009「『尾張国郡司百姓等解文』の字音声点」（『古典語の焦点・仮題』武蔵野書院所収,2009 刊行予定）
貴重古典籍刊行会 1955『将門記』（楊守敬旧蔵平安初期写巻子本複製）貴重古典籍刊行会
金田一春彦 1953「国語アクセント史の研究が何に役立つか」（『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』三省堂所収）
古典保存会 1924『将門記』（真福寺蔵承徳写本影印）古典保存会
佐々木勇 2009a『平安鎌倉時代における日本漢音の研究　研究篇』汲古書院
佐々木勇 2009b『平安鎌倉時代における日本漢音の研究　資料篇』汲古書院
猿田知之 1973「楊守敬旧蔵本将門記に附されたる声点について」立教大学日本文学 30
東京大学史料編纂所編 2009『東京大学史料編纂所影印叢書 5　平安鎌倉古文書集』八木書店

（呉音資料一覧）

呉音資料として用いた影印と参考情報は次の通りである。

『金光明最勝王経音義』…承暦 3 年 [1079] 写,『古辞書音義集成 12　金光明最勝王経音義』汲古書院,1981 年

など、必ずしも本資料の差声が漢語アクセント的というわけでもないことが分かる。

『観智院本類聚名義抄』和音・呉音…鎌倉初期写,『天理図書館善本叢書　観智院本類聚名義抄』八木書店,1976 年（参考：築島裕「呉音・漢音分韻表」『日本漢字音論輯』汲古書院,1995 年）
『九条家本法華経音』…鎌倉初期写,『古典保存会複製本所収　九条家本法華経音』,1936 年（参考：沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』武蔵野書院,1982 年）
『法華経音訓』…至徳 3 年 [1386] 版,『日本古典全集』所収（参考：島田友啓編『法華経音訓漢字索引』古字書索引叢刊,1965 年）
『保延本法華経単字』…保延 2 年 [1136] 写,『保延本法華経単字』古辞書叢刊刊行会,1973（参考：島田友啓編『法華経単字漢字索引』古字書索引叢刊,1964 年）

―山形短期大学総合文化学科―